

風立ちぬ、いざ生きめやも

——堀辰雄の母と子の物語——

（中）

松 原 秀 江

要 旨

『フランダースの犬』は、日本の子供たちにとって、「永遠の名作」とも云える作品である。明治四十一年日本語版が出て以来、平成十六年まで百点以上も刊行された。この作品と、『ルウベンスの偽画』・『聖家族』、及び堀辰雄その人とのかわりについて、愛と友情・偉大な芸術（家）への憧れを中心に述べる。

キーワード…『フランダースの犬』 ルーベンス 片山母娘 『ルウベンスの偽画』 『聖家族』

一

『ルウベンスの偽画』の「ルウベンス」に改めて注目すると、アツと思うことがある。『ルウベンスの偽画』は、大正十四年七月、上旬から二か月、軽井沢に滞在した辰雄が、特にその「夏の末、片山夫人（松村みね子）・令嬢、芥川龍之介と一緒に追分にドライブした」ことを「主材して美化して小説化したもの」だった。同じ年の五月、春秋社から『フランダーズの犬』が出ている。のみならずこの作品が一月に金の星社から刊行された（書名は『フランダーズの少年』。昭和二年二月、『ルウベンスの偽画』の初稿が「山蘭」に発表され、一月にその改稿の出た昭和四年五月にも、文藝春秋社刊の小學生全集第二十六巻に、『黒馬物語』と共に『フランダーズの犬』が出ている。又定稿の発表されるのは昭和五年五月だが、翌六年の四月にもこの作品は、玉川學園出版部から刊行された。

『フランダーズの犬』は、寄る辺ない孤独な少年・ネロルと、老犬・パトラッシュの美しい愛の物語である。と同時に十七世紀フランドル派の大画家・ルウベンスを語る物語でもある。明治四十一年（一九〇八）内外出版協会から日本語版（日高善一訳）が出て以来、この作品は平成十六年（二〇〇四）まで約百点⁽²⁾、あるいは百二十余点⁽³⁾も刊行されてきた。しかもよく読まれたらしく、たとえば神戸市立中央図書館で検索すると、おびただしい数の『フランダーズの犬』が出てくるにもかかわらず、何度も繰り返し子供たちに貸出すうちに、失われてしまったのだろう、一々現物を確認することはできない。そしてラジオが普及すればラジオでも放送され⁽⁴⁾、アニメにもなって、特にアニメの影響は甚大で⁽⁵⁾、海外旅行も容易になると、日本人観光客の問い合わせで、ネロルとパトラッシュの住んだホーボーケンには彼らの銅像が建ち、アントワープ・ノートルダム大聖堂の出口手前には、彼らを描いたステンドグラスもあり、そのステンドグラスの両側に、日本語が書かれていたりもする⁽⁶⁾。そんな中でこの作品によってルウベンスの絵や、アントワープを知った者も少なくないと云われ、しかもこの作品が日本の子供たちにとって「永遠の名作」⁽¹⁾であるのなら、『フランダーズの犬』と『ルウベンスの偽画』の刊行年月が前後し合ったとして、何ら不思議ではないのかもしれない。

だが、一八七二年（明治五）この作品を書いたイギリスの女流作家・ウィーダは、特に少年文学の分野で「高貴な感情とゆたかな想像力」

を發揮し、⁽⁷⁾

「普通の人には見えない景色を見、普通の人には聞こえない声を聞くこと」(「ニルンベルクのストープ」)を、芸術家の役割とし、夢のような空想を大事にする⁽⁸⁾

作家だった。そして「表層的には、少年と老犬の美しい友情の物語である」「フランダースの犬」も、

その深層の部分には、芸術家(あるいは若い芸術志望者)と市民の対立(または葛藤)の主題があることがわかる。⁽⁸⁾

と云われている(後に詳述)。とすればウィーダと『フランダースの犬』の世界は、(上)で既に見てきた辰雄と『ルウベンスの偽画』などの世界に、極めて近いと云えるだろう。

それもそのはず、と云ってよいだろうか。十九世紀末のヨーロッパ文学には、右に記したような「芸術家小説」と呼ばれる小説が現われ、アイルランドの作家、ジェイムズ・ジョイスの『若い芸術家の肖像』(一九一六)は、その代表的な作品だった。⁽⁸⁾ しかもこのジョイスの小説の「幼児の内的経験の描写から始まる」斬新な手法は、大正八年(一九一九)には既に芥川が注目し、同年十月には、『世界少年文学名作集』の第四巻として、『黒馬物語』と共に『フランダースの犬』が出ている(但し非売品)。辰雄は十五歳、犀星を紹介した広瀬雄が校長を勤める東京府立第三中学の三年だが、第一高等学校(理科乙類)で神西清と出会い、文学にかかわり始める以前のことではある。だがあるいはひょっとして、双方の母親が「旧知の間柄」で、そのせいかよく遊んだ近所の国文学者・内海弘蔵の子供達を通して、幼い頃から夢がちな少年だった辰雄は、ルーベンスに憧れる孤独な貧しい少年、ネルロが主人公のこの作品を、知る機会があったかもしれない。辰雄の全作品中、「屈指の初恋小説」と云われる『麦藁帽子』は、

私は十五だった。そしてお前は十三だった。

と始まり、その少女のモデルは内海弘蔵の三女・妙だったと云われ、⁽¹⁰⁾ しかも更にこの書名は、ルーベンスが「美術の世界へ与えたもつとも大きな寄与の一つ」⁽¹¹⁾とされる、美しい婦人像の画名に同じである。

のみならず、既に見たように、大正十四年五月春秋社刊の『家庭文学名著選』に、『少年と犬』の書名でこの作品の載っている事実を見逃す訳にはいかないだろう。というのも、先ず奥付に「豫約」と記して、『クオレ』『黒い馬』と共に出たもの(奥付には「フランダースの

犬」とある」と、定価を記して『クオレ』を省く二種もの『フランダーズの犬』が出ているからである。更に同年七月、上旬から二か月間、既に志氣を失った孤、独、な辰雄が、芥川や片山母娘らと共に、軽井沢で過ごした時の体験が、『ルウベンスの偽画』になっているからである。改めて云うまでもなく広子は、キリスト教精神に基づく東洋英和女学校に学び、『シング戯曲全集』(大正十二)などのすぐれたアイラ、ンド文学の翻訳のある松村みね子だった。「藝術の國」「詩の國」と云われる日本(家庭文學名著選『クオレ』序文)に生まれて、歌人としても名をなした彼女は、明治四十一年刊の日本基督教会の牧師・日高柿軒訳述の『フランダーズの犬』をいち早く知り、「藝術の偉大な力」のこもったこの「静かな感動に打たれる」(金の星社刊『フランダーズの少年』はしがき)作品を、長男・達吉(明治三十三年生れ)や長女・総子(明治四十年生れ)の為に、所持することがあったかもしれない。達吉は昭和二十年急死するが、吉村鉄太郎の名ですぐれた評論を発表し、総子も、「何時のまにか」深く学んだ「ヂェムズ・チョイスの方法」で、「特異な光彩」を放つ女流作家・宗瑛になってゆく。

そして更に、自伝小説『若い、詩人の肖像』(昭31・8)のある伊藤整が、

ジョイスの「意識の流れ」の文体を小説に取り込んだ新心理主義の代表的理論家兼実作者として活躍し、やがて堀辰雄の文学の特徴を分析し、それを文学史に位置づける評論を書くことによって堀辰雄評価の基礎を築くことになった。

と云われ、終生辰雄の父親がわりのような存在だった犀星に、『わが愛する詩人の伝記』(昭32・12)のあることを見るなら、『失われた時を求めて』の二十世紀文学を代表するブルーストと共に、ジョイスはというより、十九世紀末のヨーロッパ文学に現われた「芸術家小説」は、カロッサの『幼年時代』の影響もあるが、『聖家族』以後、幼い頃の内的体験を振り返り始める辰雄の文学を理解する上で、見逃してはならないことのように思われる。

二

先ず『フランダーズの犬』と『ルウベンスの偽画』を、辰雄の境遇など重ねながら比較してみよう。大正十四年五月刊の『少年と犬』(以後『フランダーズの犬』と記す)は、次のように始まっている。

ネルロとパトラッシュとユ——

此のふたりは寂しい身の上同志だ。ふたりとも此の世に手頼るべき人もなく、孤りとり残されたその孤り同志であるから、仲のよい友達であることは云ふまでもない。(中略)——兄弟でも是れ程の仲の好い兄弟は無い。これ以上の親しさは想像されない程な親密な間柄である。

と。主人公・ネルロ⁽¹³⁾は辰雄に、老犬・パトラッシュは、母・志氣に重ねてよいだろうか。もつとも志氣には三人の妹と二人の弟がいるが、父親を脳卒中で亡くした後、芸者になったらしい彼女について、辰雄は『花を持てる女』の中で、次のように述べている。

私の生まれるまでの、十年ちかい年月を、私の母はそれらの若い妹や小さな弟をかかえて、気の弱い、内気な人だったらしいおばあさんを扶けながら、どんなにけなげに働いたか、そしてどんなに人に知られぬような苦勞をしたか、いま私にはその想像すらも出来ない。と。パトラッシュは江戸の名のある「町家」の出である志氣とは違い、「特に何世紀の間、フランダーズで祖父ゆづり親ゆづりの激しいむごたらしい労働を耐え忍んで来た雑りけのない犬」である。生まれて一年も過ぎると、「ほんの安い値段で」売り飛ばされこき使われたその揚句の果て、「夏の白つばい砂ほこりのなか」、「口から泡を出して」倒れると、「泥溝のなかに」蹴込まれ、死んだようになっていたのを、ジュハン・ダアズ爺さんと、その娘の「わすれ形見」のネルロに助けられ、生き返ったのだった。志氣も大正十二年九月の関東大震災で、多くの避難してきた人たちと隅田川に飛び込み、泳げずに水死している。従って辰雄は、ネルロ同様志氣の「わすれ形見」だが、志氣が生き返ることはない。

だが、大人になり始める十三歳の頃の年譜に注目してみよう。そこに、

好みし学課は数学のみ、いまだ文学書の類にも親しまず。蘆花、藤村、鏡花などの小説をいささか読めるのみ。

と、辰雄自身が書き込んだ部分の「鏡花」に対する興味は、晩年(四十六歳。四十八歳で亡くなる)彼が病いの為思うように読書が出来なくなっても、夜はその作品など多恵夫人に「読んでもら」う程のものだった。鏡花は幼い頃死別した実母に憧れ続け、

露草や赤のまんまもなつかしき

の句が絶筆になるが、若い頃中野重治が、

風立ちぬ、いざ生きめやも(中)

お前は歌うな

お前は赤ままの花やとんぼの羽根を歌うな

と「歌った」時、辰雄はこの二行で始まる「その詩独得の美しさ」に、「半ば同意しながら」、

しかしその一方これこそわれわれの人生の——少くとも人生の詩の——最も本質的なものではないかと思はずにはいられない幼年時代のささやかな幸福——それをこの赤ままの花たちはつましく、控目に、しかし見る人によってはほとんど完全な姿で代表しているのだ。……

と記している（『幼年時代』赤ままの花）。とすれば志気は終生辰雄にとって「最も本質的な」存在、多恵夫人が云うように、魂の古里とも云うような「最愛の人」だったのだろう。志気は辰雄の心の中で生き続けた。

しかも『曠野』（下）で述べる）を書き終えた辰雄が、グレゴの「受胎告知」を見る為に、倉敷の大原美術館まで足を運び、その絵の前、ソファで、「いい気持ちで居眠りしてしまった」のも、ネルロがアントワープの大寺塔の祭壇の「マリア昇天」の絵の前で、「身も心も恍惚として」^{うつとろ}「跪^{くつ}つて居た」ことと、無関係ではないように思われる。『フランダースの犬』では、アントワープはルーベンスの「生れてから死ぬまでの地」⁽¹⁵⁾で、その「誕生地の中央に當る聖ジャックエ寺院内」には、彼の墓標もあると記すが、辰雄はルーベンスの『聖家族』も観ていただろうか。

聖母マリアの膝の上に幼児イエスが立っている。その背後から聖母マリアの母聖アンナが2人をそとと抱きかかえ、画面右奥から聖母マリアの許嫁（いいなづけ）の夫聖ヨセフがのぞき込んでいる。

——この「哺乳の聖母」という伝統的な主題に基づくルーベンスの絵⁽¹⁶⁾は、いかにもバロック美術を代表する大ルーベンスの絵にふさわしく健康で生きくとした生命感にあふれている。だが、これらの人物をそのまま、「清く寂しく」美しい色合いに染め直すなら、それは向町の彫金師・上条松吉宅での辰雄の幼年時代につながるだろう。幼い辰雄は、志気の膝の上に乗るのが好きだった。そして「一か月位ずつ」ではあるが、年とった大好きなおばあさんが、辰雄たちの「居心地のいい家」にやって来て、お互に「つましく——控目に」「やさしく愛し合」い、「幸福」だったにもかかわらず、何故か悲しく「幸福という幸福のすべて」が、「子供らしい悲しみにまんべんなく裏打されて」

いた辰雄の幼年時代。それはほとんどそのまま、「大畫画ルベンスのやうに成りたい」、ルーベンスの絵を見たいと願つて叶わず、「度々喜びと悲しみとが一緒になつたやうな、何んとも押し計ることの出来ない涙」を流すネルロと、そんなネルロを気づかう老犬・パトラッシュ、そして自分もパトラッシュも亡くなつたらと、幼いネルロの行末を案じる「腰のかゝんだ弱々しい跛びつのよぼ／＼爺さん」の、ひどく貧乏だが、お互にやさしく愛し合い、笑い声のたえない幸せで静かな毎日につながるだろう。

更にネルロが、

黒みがかつた凜としたやさしい眸、頬は花の咲いた様に輝き、綺麗な髪が長く襟頸まで垂れて房々として

まるで「ルベンスの名畫から抜け出たかと思はれる」やうな「愉快げな無邪氣な」「美しい少年」だったやうに、辰雄も又、犀星が初めて会った時の印象を、「よい育ちの息子の顔付に無口の品格をもった」、「どこかの俳優の子でもあるやうな」（我が愛する詩人の伝記）美しい青年だったと述べている。それは、大正五年一月七日の劍舞する凜々しい少年（十二歳）・辰雄の写真を見ても明らかだろう。

そんな辰雄は幼い頃人見知りで、「一人で絵本ばかり見て遊んでいた。絵本ではないが、『フランダーズの犬』も知っていて（国文学者・内海弘藏の妻女と旧知の間柄だった志氣も、彼女を通して『フランダーズの犬』を知り、辰雄のことになるともう夢中になる志氣は、辰雄に既に買ひ与えていたかもしれない。彼女は文学を志す辰雄が何か書くと、原稿料だと云つて、何がしかの金銭を手渡すやうな母親でもあった）、その本の中でジューハン・ダース爺さんが孫のネルロに、

俺等は貧乏人ぢや。何でも神様が下されたものをそのまゝ、戴かなくちやならぬ。良いものも受けるし、悪いことも受けるのぢや。貧乏人は擇り好みするのぢやない。

と云い聞かせたその言葉を、無意識のうちにどこかにひっそりと、既に仕舞い込んでいたのだろうか。あるいは志氣が、いつの間にかそのやうに、仕付けてしまつていたのだろうか。幼い辰雄は、幸せでも何故か悲しく、いつもその悲しさを「自分ひとり、で悲しんでいれば、すべて好くなる」と、密に「思ひ込んでいた」。そして腑に落ちない事も「訊きこうともせず、に、まるで自分の運命、そのもののように、それをそのまま鵜呑みにしようと努力していた」。ネルロもまた、大事なことも「あきらめて」、逆らわない「静かな」少年だった。

だがしかし、「お爺さんを尊敬して居た」ネルロは、この言葉に「黙つて耳を澄し」、「皆尤ものことと領うけいた」にもかかわらず、心の中

で「ぼんやりと」、「その天才を發揮しろと勵ますもの」を、無視できないでいる。そして、

いや。貧乏人だからとて時には撰ぶことが出来る。偉くなる道を選ぶそれを誰がいけないと云はうか。

と考え、「大畫家ルベンスのやうに成りたい」とばかり思っていた。というのも、「小さな村の端れの小さな藁掛の小屋」で、お爺さんやパトラッシュと暮っていたネルロは、広々と広がる牧草や麦畑の遙かむこうに、まるで「夢」のようにそびえ立つ、アントワープ大聖堂（聖母マリア大聖堂）の尖った塔を、いつも独り見ていたからである。この寺院はノートルダム大寺院とも云われ、十六世紀に完成したベルギー最大のゴシック建築だった。⁽¹⁷⁾のみならずアントワープは、「藝術家の中の藝術家」といってもいい、大画家・ルーベンスが生まれて亡くなり、その魂が今も「彷徨つて居る」と信じられていた。そのアントワープに、ネルロは老いたお爺さんに代り、パトラッシュと毎日牛乳配達に通っていたのである。ベルギー第二の都市で、十五世紀にはヨーロッパ最大の港でもあったアントワープについて、ウィーダは『フランダースの犬』の中で、次のように述べている。

昔、ルベンスが此地に出なかつたら、アントワープは今日、下らない、唯の市街で、觀るものと云へばたゞ／＼埠頭にあつまる商人達でも見る位なものであつたらう。

アントワープに到る所、ルベンスの魂を見るやうな美しいところがあつて、假令まわりに醜いものがあつても、それを覆ひ隠してしまふ位である。もし私達がこの地に遊び、足にまかせて、或は曲りくねつた街道を散歩し、或は死んだやうに静かな水の邊に佇むならば、よしや、遙かの彼方、或はその居圍りにいろいろ騒がしい物音が聞こえるとも、嘗てルベンスが見たと同じ美しさが私達の眼にも見ることが出来るやう。

恰度アルトワープ全市がルベンスの墓と云つてもいい位で、我々がアントワープ市に這入りさへすれば直ぐにルベンスのことを思ひ浮べるやうに、遠き昔の面影風情が残つて居る。

と。そして更にネルロの血には、ルーベンスは勿論、その影響を受けてアントワープで活躍した画家、ヤーコブ・ヨルダーンスやファン・アイク兄弟などの大芸術家の「天才と同じもの」が、「宿つて居た」とも述べている。

辰雄にとってのアントワープは、下町を抜け出し、しばしば滞在した軽井沢だったに違いない。だがルーベンスは、その地に深くかわ

るものの、芥川だったろうか、ボードレールだったろうか。十九世紀ヨーロッパ最大の詩人の一人で、最も重要な美術批評家でもあったボードレールは、二十世紀初頭日本に紹介され、「蒲原有明や芥川龍之介、萩原朔太郎などに大きな影響を与えた」と云われている。⁽¹²⁾

既に云われているように、「芥川の作家としての生き方」・「その美学と作品」は、「最も手近な理想」として辰雄の前にあった。⁽¹⁹⁾だが、師、とたのも芥川の自殺にショックを受けながらも、『芥川龍之介全集』（岩波書店刊）の編集に従事し（昭和三年七月まで）、その全業績を目的あたりにし、卒業論文で「芥川龍之介論―芸術家としての彼を論ず」（昭4・3）を書いた辰雄は、「藝術のための藝術について」（昭5・2）で、芥川が、

何よりもボードレールの一行を！

と云ったその「言葉の終るところから僕の一切の仕事を始めなければならない」と述べている。また「美しかれ、悲しかれ」（昭14・12）では、芥川がささやいたそのボードレールの一行、

美しかれ、悲しかれ

程、「若い時分のことを、その苦痛も飲ぶも、一しよに思い出させるものは」ないとまで云っている。だがしかし、芥川に読んでもらった最後の原稿になった処女作・『ルウベンスの偽画』について、次のようにも云っている。

その頃の私はどうもすこしボードレールかぶれしてみたやうに見える。ことに彼の好きな雲を私も好きになつて、例えば『スウブと雲』と云う散文詩に出てくる（中略）その雲のごときものを、私は何んとかして、一度でいいからこの手に触つて見たいと思ひつめてゐたであつた。

（『ルウベンスの偽画』に 昭8・2）

と。ボードレールが、「スウブをすすするの忘れて」、「窓からうつとり」雲に「見とれていた」ように、既に志気を失い、貧乏で結核に悩む辰雄が、「現実の煩さ」など、「何の価値もないもののよう」に「思っていたことは既に述べた」⁽²⁰⁾。そしてその彼が、「何とかして一度でいいからこの手に触れて見たいと思ひつめてゐた」「雲のごときもの」が、軽井沢で展開される朔太郎や芥川・犀星、とりわけ広子・母娘の世界だったことも。⁽²⁰⁾

三

とすれば、辰雄にとつての広子母娘は、ネルロにとつてのルーベンスの二組の大作、「キリスト昇架」（十字架上の昇天）とも・「キリスト降架」（十字架上の降臨）とも）に、かかわるのだろうか。『フランダーズの犬』は、「どんなに貧しくても人間らしさを失わない生き方をしめじみと語りかけてくれる、すぐれた愛の文学」⁶だった。それはどんな不幸に見舞われても、愛し合うネルロとパトラッシュを通して語られる。そしてネルロが見たいと憧れるルーベンスの二組の大作に描かれるキリストは、その象徴だったろう。というより、この二組の絵に描かれるキリストはネルロの、聖母・マリアはパトラッシュの象徴だったと、云つてよいだろうか。昭和二年一月、金の星社から出た『フランダーズの少年』の「はしがき」には、この作品について、次のように述べている。

おそらく何人も、読み終つた後、大きな聲でもいへないやうな、静かな感激に打たれる事と思ひます。

それはこの作の持つてゐる藝術の偉大な力です。宗教味を帯びた大きな藝術の力がこもつてゐるからです。丁度ルーベンスの畫に向つた時感じると同じ力が、この作品にあるともいへませう。

と。いかにも、この通りだと思われる。辰雄もこの作品を読んでいたら、同じ感慨にひたつたのではなからうか。だがだからと云つて、その文学の世界が、これに同じだと云うのではない。結論を急ぐ前に、辰雄の作品と比較しながら、今少し詳しく見ていこう。

大畫家ルーベンスのやうに成りたい

と願うネルロの「男々しい考へ」は、辰雄の文学への思いを、広子も総子も知っていたように、パトラッシュの他にアロアも知っていた。ネルロとパトラッシュが「一番好き」で、「柔らかな丸々とした薔薇の花のような姿にパツチリ黒味がかつた瞳の愛らし」いアロアは、村一番の金持の一人娘ということも相まって、「薔薇の皮膚」を持つた

彼の描きかけの「ルーベンスの偽畫」の女主人公

によく似ているだろう。のみならず、アロアを写生していたネルロは、彼女の父親のコゼツ旦那に見とがめられ、写生など「馬鹿げた事」

「悪い暇つぶし」・「怠惰」^{なまけもの}のする事と罵られ、その絵を取り上げられただけでない。「顔も姿も眉目もよい」ことまで仇になって、将来二人に「心配事」が起つてはと引き裂かれ、ネルロはアロアの誕生日にも、独りのけものにされるのだから。というのも、『聖家族』には、扁理（辰雄がモデル）が遠ざかってしまった理由を、絹子（総子がモデル）が次のように考える部分があるからである。即ち、

あの人は始終自分の貧乏なことを氣にしておたやうだけど……（中略）あの人は私のお母さんに誘惑者のやうに思われたくなかつたのかもしれない。あの人が私のお母さんを怖れてゐたことはそれは本當だわ。……こんな風にあの人を遠ざからせてしまつたのはお母さんだつて悪いんだ。私のせゐばかりではない。ひよつとしたら何もかもお母さんのせゐかも知れない……

などと。

だが幼いアロアがネルロを、コゼツの旦那が云つたように「畫、かき、になろうなど、途、方、もない馬鹿げた夢を見て居る」「乞食風情」などと思つてゐる訳ではない。アロアはネルロを想いながら、父親を恐れているだけである。従つて勿論、『ルウベンスの偽畫』の少女のモデルである総子その人に、アロアは重ならないだろう。葉穂子のモデルでもある総子が、「紅」のように美しくても、儚い「雲」のような「夢」の限界などつきとめようともせず、

なんでも自分のなさりたいと思ふことをしてもいいと思つてゐるやうな天才なんていうものは、私は少しも自分の側にもちたいとは思つてゐませんわ。……

とばかりに、文、字、は勿論辰雄も捨てて、「世、間、並、に出来上がった」男を、夫に選んでしまつたことは既に述べた。⁽²⁰⁾

だがネルロは、総子にも似た俗世間の典型かと思われるコゼツ旦那の仕打に、「恨み言も云はず」「男らし」く「あきらめて」耐えてゆく。雪の中で拾つた持主不明の人形を持つて、アロアを喜ばせたいと、その家に立ち寄つた日、コゼツ旦那の粉挽場が火事になり、濡衣をさせられても。そのせいで金持になびく村人に爪はじきにされ、牛乳配達の仕事がなくなつても。また憧れ続けた絵の審査にもれ、心に秘めたたつた一つの望みも失い、その笑顔が支えだつたお爺さんも亡くなつて、粗末な小屋からも追い出され、食べる物も寝る所も失つても。ネルロは、雪の中で拾つたコゼツ旦那の「六千法」^{ろくせんぽう}もの「大金の切手」を手にするや、「一直線に粉挽小屋に駈けつけ」る。そしてそのクリスマスの前夜、空腹にあえぐ老いたパトラッシュをアロアに預け、絶望の果てにたどり着いたアントワープの大聖堂で、ネルロを捜し当

てたパトラッシュと共に、見たいと切望したルーベンスの二組の絵を、「清く」「照り輝く」月あかりの中で、偶然見ることができると、見た。僕はたうとう見た。

あ、神様。此上は何も要りません。

と「荘嚴な畫をつくぐ」と見あげて、「翌日「クリスマスの朝がほのく明け」と、その絵の下でネルロはパトラッシュと抱き合い、「笑」を浮かべて死んでいたのだった。

この作品が、

——永遠に。

と結ばれていること、そして又、

石の様に抱きあつた人と犬との死骸の上に、ルベンスの名畫は覆を破りとられて其偉大なる天才の筆の跡を現はし、照す朝日の鮮かな光りが、神の子の頭に置いた荊棘の冠を射て居た。

とあることを見るなら、どんな不幸の中でも、「神の心」を失わない「すぐれた人間」だったネルロは、神に召されて神の子・イエスになったと、云つてよいだろうか。そしてルーベンスの二組の大作、「十字架上の昇天」「十字架上の降臨」に描かれるイエスと聖母・マリアを、そんなネルロと、どんな時もネルロから離れようとしなかった老犬・パトラッシュに、そして更に辰雄と志氣に重ねることができだろうか。

また、扁理が、夢の中で、九鬼（芥川がモデル）に問われて、

ラファエロの聖家族でせう

と答えた

その畫のなかの聖母の顔は細木夫人のやうでもあるし、幼児のそれは絹子のやうでもあるので、へんな氣がしながら

と記されていることに、注目するならどうだろう。改めて云うまでもなく、細木夫人のモデルは広子である。「夢のなかで」「へんな氣がしながら」と記すのは、とすれば「非常に神聖な、美しい」「何か非現実的なもののやうに思はれる」広子に憧れ「怖れてゐた」辰雄が、

まぶしく見えてもより現実的で世俗的な総子が、「彼女の母にはまだ」あまり似ていないと、思っていたからだったろう。そしてそのことが彼には、「何となく」「氣に入ら」ず、自分の「いまの氣持からは」、「離れ過ぎてゐる」と、思っていたからだろう。だが、『聖家族』が次のように終っていることに、注目してみよう。自分の「本当の心」が分からず、「ほんたうに愛してゐるもの」から遠ざかるうとして苦しむ河野は扁理、辰雄がモデルである。即ち、

絹子は（中略）、彼女の狂暴な顔をいきなり夫人の方にむけながら、

「河野さんは死ぬんぢやなくつて？」と出しぬけに質問した。

（中略）

「そんなことはないことよ……それはあの方には九鬼さんが憑いてゐなさるかも知れないわ。けれども、そのために反つてあの方は救はれるのぢやなくつて？」

（中略）

「さうかしら……」

絹子はさう考へながら、始めはまだ何處かしら苦痛をおびた表情で、彼女の母の顔を見あげてゐたけれども、そのうちにちつとその母の古びた神々しい顔に見入りだしたその少女の眼ざしは、だんだんと古畫のなかで聖母を見あげてゐる幼児のそれに似てゆくやうに思はれた。

と。辰雄にとって広子母娘は、輕井沢での聖母子であつてほしい存在だったのだと思われる。とすれば、

彼の描きかけの「ルウベンスの偽畫」の女主人公の持つてゐる薔薇の皮膚そのまゝのもの

も、『フランダースの犬』のネルロ（薔薇色の顔をした髪綺麗な眸の黒い子）や、ネルロと大の仲よしのアロア（薔薇の花の様な姿・薔薇のやうな手）の容貌・容姿に通つてくるだろう。そしてまた、ルーベンスの「聖家族」の中の幼いキリストや、更には何よりも、「クララ・セレーナ・ルーベンスの肖像」のルーベンスの長女、クララ・セレーナ（十二歳で没）の頬の色にも。「聖家族」の聖母・マリアのモデルも、この長女の母親も、ルーベンスにとつて最愛の最初の妻・イサベラだった。彼女はアントワープの富裕な名家の娘で、誠実で賢く心暖か

な女性だったと云われ、三十五歳の若さで亡くなっている。⁽¹¹⁾ 辰雄が知っていたら、広子や志気に重っただろう。

つまり貧乏で結核に悩み、志気を失って孤児^{みへい}だった辰雄は、既に云われてもいるように、上条松吉が実父でないことを、幼い頃からひそかに知っていて、いっどこで知ったか不明だが、『フランダーズの犬』は、無関心ではいられない愛読書の一つだったと思われるのである。

〈注〉

- (1) 森山京「芸術への情熱で描いた、少年と犬との愛」(小学館世界の名作 11 フランダーズの犬)
- (2) 榊原貴教「ウィーダに見る翻訳社会史／『フランダーズの犬』の再話に即して」(翻訳と歴史―文学・社会・書誌 第25号)
- (3) 「フランダーズの犬」(図説児童文学翻訳大事典 第2巻【原作者と作品】大空社)
- (4) 昭和十年十一月『ラジオ世界名作物語』第三輯(東京放送児童話研究会編 清和書店)
- (5) 昭和五十年「世界名作劇場」第一回平均視聴率二二・五%、最終回では三〇%を記録し、終了後ただちに「アンコール名作劇場」として再放送されただけでなく、ビデオやDVDにもなった。
- (6) 西本鶏介「熱い涙を呼ぶ愛の文学」(小学館世界の名作 11 フランダーズの犬) ルーベンスの工房のあったアントワープのフルン広場にはルーベンスの像もある。
- (7) 村岡花子解説(新潮文庫『フランダーズの犬』)
- (8) 「ウィーダ フランダーズの犬」(世界少年少女文学 リアリズム編 自由国民社)
- (9) 『世界大百科事典』13(平凡社)
- (10) もっともこの作品は昭和七年九月に発表されている。が、『清く寂しく』(大10・11)のT子、『甘栗』(大14・9)の朝子のモデルも妙で、『閑古鳥』(昭12・9)、『山茶花など』(昭13・1)の「私の少年時代の恋人」も彼女だった。しかも辰雄は妙の遺児・玲子に、限定版の『麦藁帽子』を贈り、その扉に、
昔の女たちよ、おまえたちは私から遠のけば遠のくほど、私のうちでなんと新鮮な姿になってくることか！
と書いている。又、妙の兄の弘や章は、辰雄と年令も近く野球などの遊び友達で、内海家の避暑地に呼び寄せられたりもしている(堀辰雄事典 竹内清己編 勉誠出版)
- (11) 『リユーベンス』(新潮美術文庫 10)
- (12) 『堀辰雄事典』(竹内清己編 勉誠出版)
- (13) 最も原作に忠実な名訳と云われ、昭和二十九年の訳以来平成十六年まで、七十二刷にもなる程の人気のある村岡花子訳ではネロ。注も付け良心的と思える岩波少年文庫114の『フランダーズの犬』(平15)の野坂悦子訳も同じ。が、『小学館世界の名作』11(平成10)ではネルロ。英

文はZ¹⁰。明治・大正・昭和（10年まで確認）はネルロ。

(14) 谷田昌平編「訂補堀辰雄年譜」(堀辰雄事典 竹内清巳編 勉誠出版)

(15) ルーベンスが生まれたのはドイツのシーゲンで、アントワープに落ちつくのは三十二歳以降。

(16) 『eMOOK ルーベンス ネロが最後に見た天使』(宝島社)

(17) 野坂悦子訳『フランダーズの犬』注(岩波少年文庫)

(18) 『ブリタニカ国際大百科事典』18(ティービーエス・ブリタニカ)

(19) 中村真一郎『芥川龍之介』(要書房)

(20) 松原秀江「風立ちぬ、いざ生きめやも」堀辰雄の母と子の物語―(上)―(大手前大学論集11)

—この稿続く—

(附記)

本稿はゼミナールⅡで、「プロローグ／いのちの泉・絵本との出会い」(柳田邦男『砂漠でみつけた一冊の絵本』岩波書店)を、学生と共に読んだことがきっかけになりました。また稲積包昭先生・森道子先生に様々な御助言をいただき、本校の図書館は勿論、国立国会図書館・大阪府立中央図書館・神戸市立中央図書館の司書の方にも、お世話になりました。心より厚くお礼申し上げます。

風立ちぬ、いざ生きめやも(中)